

紀伊半島における野生ニホンザルの分布学的研究 (主として和歌山県について)

前川 慎吾 (海南高等学校)

和歌山県側の野生ニホンザルの分布域並びにその分布密度は、今回の調査により、これまでの奈良県三重県の調査結果からの予想をはるかに下まわるものであることが明らかになった。

分布域は有田川南岸を北限として、それ以南に限定され、しかも、その分布状況は、紀伊山脈から西に流れる主要河川、無制限と思われる自然林の伐採、人工造林等により分断され、互に隔絶され、次のような四地域を形成している。それは、白馬山脈 (A地域)、高尾山一帯無山脈を連ねる山系 (B地域)、椿を中心とする海岸沿いの地域 (C地域)、大塔山系 (D地域) の四地域であるこの分布地域は即自然林の分布状況を示していると考えてよいと思われる。

今回の調査及びそれ以前の調査により、これまで確認あるいは推定されている群、および個体数は次の通りである。A地域で8群、240~260頭、B地域で5群、150~180頭、C地域で3群、180頭 (この中に餌付けされている椿の群れ、110~130頭が含まれている)、D地域は34群、930~1,080頭 (但し、この数字は調査不充分のため、川村と筆者との間で、一部重複している可能性がある)。調査をしてみて、和歌山県、奈良県、三重県とも、県境における開発 (伐採、造林) が急速にしかも大規模に進められているのが明らかになり驚いている。ことに和歌山県側において、県境 (奥地) からの開発と、海岸線側からの開発が同時に進められ、ニホンザルの生息条件が時々刻々せめられて行っていることは注目すべき点であると思える。

ニホンザルの生活史とその生息環境に関する比較生態学的研究¹⁾

木村 光伸 (日本モンキーセンター)

ニホンザルが、現在生息している環境条件に対してどのような適応形態を示し、かつそれが彼ら自身の生活にいかんにか反映しているかを生態学的に考察するために、主として越冬期の白山で daily activity の観察・測定を行い、前年度までに得ている幸島群の data との比較を試みた。feeding, resting, locomotion 等に費される時間は幸島群では比較的明確な3山型の pattern を示すのに対して、越冬期の白山 (カムリA群) では、日毎の変動が大きく、pattern 化すること自体、無意味であると考えられ、安易に daily rhythm を測定し pattern 化

すればザルの行動が理解し得ると考えることに対して否定的な結果を提供した。

越冬期の白山カムリA群に明確な daily activity pattern がみられなかった理由の一つとして、彼らの生活が毎日の天候、特に降雪に大きく影響されていることがあげられる。例えば1日の遊動距離は普通0.5—2.0kmであるが、激しい吹雪の日には全く移動しないことがしばしば観察される。そして極端な場合には彼らの食物は自分の stay している木の樹皮と冬芽等に限定されてしまい、一本の樹木が完全に裸にされてしまうことさえ生ずる。このような条件下では、移動—採食—休息の pattern は完全に崩壊しているといえる。

また、半地上性といわれるニホンザルが森林内でどのような位置にいるのかを地上・樹上別に記録し分析した結果は、越冬期の白山と幸島で大きな違いを示した。grooming は、幸島では圧倒的に地上で行なわれた (88.1%) のに対し、白山では全く逆転した結果 (地上で12.5%) となった。また、sitting をみれば、幸島では地上63.2%であるのに対し、白山では樹上88.2%となり、積雪の影響を強く受けている。一方、feeding に関しては幸島 (86.5%)、白山 (82.3%) と、どちらもほぼ同程度に樹上に固執しており、気象条件や植生型等の自然環境の違いを越えた食性の共通性を示した。

上記の比較からニホンザルが日本列島の多様な環境に極めて個別的に適応しつつ生活していることが明らかであるが、なお越冬期以外の冬季節の白山、および幸島・白山と異なる環境構造を有する地域での調査を重ねる必要がある。

香春岳におけるニホンザル野生群の生態学的研究

池田 啓 (九大・理)

江口 和洋 (同上)

この群れは1974年2・3月に半数以上の53頭が捕獲された、残された群れの行動域の利用パターン、個体数等が捕獲前と比べどの様に変化するのか、これらの点を中心に調査をおこなった。調査は、1974年6・11月に各2週間、1975年1月に8日間実施した。

調査を始めず気づいたのは、捕獲前に比べ群れが静かになったことであり、声・姿が確認できるのが1日に1度、それも数分間という場合もあった。このため追跡が困難となり、個体数も十分にカウントする機会が少なく、6月に4回、1月に2回その機会を得たがいずれも数え落しがあると思われる。このうち最大数を数えた6月24日のデータでは、A♂1、YA♂3、A♀11、4才5、3才3、2才3、1才1、4、合計31頭であった。新生児の最大数は、1月29日にカウントした6頭であっ

¹⁾ 調査費の一部は石川県の援助による

た。

香春岳をはなれ北側へ約2kmの後入道までの遊動は、6・7月のビワの時期に特徴的にみられていたが、本年の調査では観察されなかった。さらに、これまでは秋に香春岳内の自然林の多い山麓を主に利用していたが、本年度は山麓部をさける傾向がみられ、これまで利用のあまりなかった二ノ岳・三ノ岳の鞍部の利用が観察された。冬期には、一定の泊り場を集中して利用し、移動距離は他の季節に比べ短くなる傾向にあったが、1975年1月ではそれが一層顕著になり、オモノキ谷に多くみられるクスの実を主食とし、泊り場としても集中して利用した。1日当たり平均移動距離は680mと1972年、1973年の平均移動距離1,180mをかなり下まわっている。現在継続中の調査でもこの様な土地の集中利用はみられており、個体数の減少により行動域の利用がこれまでになく別の方法でおこなわれている可能性がある。

高知県におけるニホンザル個体群の分布

古屋 義男(高知女子大・家政)

昭和48年のききこみ調査によって得た資料にもとづき、今年度は高知県内7カ所のニホンザル生息地を調査した。結果はきわめて不十分であったが、以下にその概要を記す。

1. 野根山・小坂山(安芸郡東洋町)

小坂山から野根山にかけてのかなり広い範囲(7×3kmくらい)に20~30頭の群れがいる。地元では、数群いるといていたが1ないし2群と思われる。林は造林地と一部に針広混交林がある。海岸に面した民有林にもおり、国道55号線でみることもあるという。

2. 鳥帽子ヶ森(安芸郡馬路村)

鳥帽子ヶ森山(1,320m)を中心に20程度の1群がいる。ここはモミツガの天然林と、100年以上たった針広混交林である昔はここより南の通称仙谷山にもいたというが、いまは見かけないという。

3. 別府(香美郡物部村)

西に三嶺(1,893m)、東に石立山(1,708m)のある稜線の南斜面高知県側に数群いるというが、1~2群ではあるまいか、もちろん、徳島県側にも越えるものと思う。生息域がひろいので再調査の必要がある。この附近の井地山、杉熊などには、以前はいたが伐採してからいなくなったという。

4. 尻生山(長岡郡大豊町)

20~30頭の1群がいるという。

5. 奥白髪山(長岡郡本山町)

県立自然公園に指定されているところで、1群と思われる。

6. 勘定山(香美郡物部村)

いることは確かであるが、再調査の必要がある。別府の群れとは別である。

7. 大師谷山(土佐郡大川村)

早明浦ダムに流れこむ瀬戸川の北側の斜面に1群いるようである。

餌づけされていない群れを重点においた湯河原地域個体群の生態学的解明

田 中 進(マカク研究会)

箱根地域に生息する餌づけされていない群れである広河原群、須雲川群、泉群について報告する。このうち泉群は、1972年12月に餌づけ群である天照山群から分裂した群れであるが、現在群れが存在するという可能性は非常に少ないことがわかった。また、泉群が生息していた地域には、1974年秋頃より天照山群を離れた20数頭のグループが生息した可能性が強いが、これについては現在調査を継続中であり、1975年度共同利用研究の一環として報告される予定である。広河原群については、個体数の変動あるいは構成に関する新たな資料は得られなかった。遊動域については若干の変化がみられた。須雲川群については、パークウェイ群(餌づけ群)の餌づけ放棄(1974年9月15日)後の分裂による影響が強く、特に遊動域の変化がみられた。以上3群以外の餌づけされていない群れの存在に関しては、金時山周辺に1群存在する可能性が強いが、1974年には調査が十分でなかった関係上不明である。

また、餌づけ群を含めて、箱根地域の各群れ間には、個体の離脱・加入を通しての交流以外にも、群れ同士の出会い接触があることがわかった。

従前に得た資料と比較対象し、変化を明らかにする作業は、現在継続中で報告することができなかった。

オスの離脱・加入および群れ内のグルーピング現象に関する研究

福田 史夫(マカク研究会)

箱根地域に生息する近接した4群間の関係を、個体識別下にあるT群個体の離脱と加入に注目して、4群間の関係を調査した。また、同時に、年間を通じて、T群餌場に出席するグループの構成(T群の一部の個体だけよりなるグループが出席することが多い)を記録し、遊動中の群れの分岐・合流の過程をも調査した。

野生ニホンザルのグルーピング現象については、これまでの報告例は少ない。

筆者は'69年より野生ニホンザルの遊動中に生じる、群れの分岐・合流と、この間の若年オスの離脱・加入の過程の調査をおこなってきた。